

〈礼拝説教〉 2011年 10月 9日

## 天地創造一② 光あれ！

創世記 1章 2～3節

ヨハネによる福音書 1章 1～9節

武田真治

### 1、創世記 1～2章の連続講解説教

この広島教会に赴任させていただきました2007年7月1日（日）から『マタイによる福音書』の連続講解説教を始めさせて頂き、先月末をもって終えることが出来ました。心より感謝します。そして、この10月より『創世記』の連続解説教に入ります。これは「入門の会」で求道者の方からのリクエストに答えてのことです。ただ、創世記全部となりますと大変なこととなりますので、先ずは「天地創造（1～2章）」をと願っています。

### 2、創造論と進化論？

さて、この「天地創造」を読もうとする時、今の時代に生きる私たちにとっては、どうしても「進化論」に代表されるような科学的な見方とぶつかるように思えてしまいます。それ故、どちらが本当なのか？とか、私たちは進化論を信じてはいけないのか？などと考えてしまいます。実際、かつて中世のカトリック教会がそのような見方を認めなかった歴史もあるからです。

しかし、同じ一つの物を見る時にも色々な観点から見る事が出来るように、科学的な見方もあれば、聖書が私たちに伝えようとしている信仰的な見方もあるように思います。問題は、皆が同じようにどれか一つの見方をしなければいけないと考え、そう主張する態度ではないかと思えます。どの説が一番正しいかと考えることは良いことではしょうが、すべての人がこれではなければならない、そうでないとおかしいと考えることが問題です。聖書は、信仰という目から「この世界の様子」について見える事柄を私たちに説いていると言えます。それに対して、進化論に立たないとおかしいと決めつけることや、或いは逆に、中世の教会のように聖書の見方を世の中の方々に強要することが危険なものでしょう。

### 3、神様が最初に造られたもの

聖書は『初めに神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。』1～3節）と始まります。

ここで質問ですが、この天地創造の出来事の中で、神様が最初に造られたものは何ですかと誰かに尋ねられたとしたら、皆様は何だとお答えになるのでしょうか？

一つの答え方は「それは『光』です。」というものでしょう。神様がその言葉を発せられて、最初にこの地上に出現させられたものは「光」だからです。すべてはこの光の創造から始まったと。

よくこの最初の「光」が、科学に於けるこの世の始まりである「ビッグ・バン」を指していると言われたりします。もしかしたらそうなのかもしれません。世界の本質を探って行けば、科学も信仰に同じ場所に辿り着くのかも知れませんね。もちろん、私たちは何より信仰に立つ言葉として聖書の記述を受け取りたいと思いますが。

このように「光」が最初に造られたと言えそうですが、しかし、そうするとその前の二節に記してある『地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。』という言葉はどう理解すれば良いのでしょうか？それは、あたかも「光」が登場する前にすでに「地」というものが存在しており、「闇」や「神の霊」や「水」というものが先にあったと言われていると読めるのではないのでしょうか？この点を真摯に受け止めると「光」が必ずしも最も始めに造られたものではないということになります。

そこでもう一つの答えが登場します。それは最初の一節にある『初めに神は天地を創造された。』から、神様はまず「天と地」を造られたのだと、ただこの時点では『地は混沌』状態であり、その状態に対して神様が「光あれ」と言葉を発せられて神様の思いを込めた創造の業を開始されていかれたのだと受け取る読み方です。新共同訳聖書の翻訳の仕方は、この読み方に沿っていると言えるでしょう。

#### 4、混沌状態からの創造

いずれの読み方にしろ、ここで大事な点は、神様が「光」を創造された前段階に、「混沌とした」地の状態があったということです。

ここでも『混沌』と訳されている言葉は（トーフ ワウ ボーフ）という言葉で、荒れずさんだ状態でかつ無秩序な状況を表現しており、前の協会訳では「地は形なくむなしく」と訳されていました。英語の聖書では「カオス」と訳されてもいます。何の秩序も意味も持たない、まさに（混沌としている状態）のことを指します。そこでは、ただ『闇』や『神の霊（ルアハ、風とも訳せる）』のみが覆っている状態でした。

そこに神様は『光あれ』と言われ『光と闇を分け』、『夕べと朝』を定められます。更に『大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられ』ます。そして陸地と海を造り、種を持つ草と身をつける果樹を芽生えさせられて、『水に群がるもの』『地にうごめく生き物』『翼ある

鳥』を創造されて行きます。これらはまさに「混沌」であった世界に、区分と領域、そしてそこで生きる生命を、しかも各々の存在の在り方を決めて創造しておられるのです。つまり、この世界に様々なものを創造されることによって、神様はこの世界の混沌状態をなくそうとしておられるのです。言い換えれば、混沌とした何の定まりのない世の中に、神様は創造物を生みだすことで《生命と生きる意味》を、そしてこの世界に《秩序》を与えようとしておられるのです。その意味に於いてまさに「無の状態（＝空しさ）からの創造」なのです。

この点は、例えばこの後に、太陽と月が創造された時『大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めせられた』ということや人間を創造されて『地を従わせよ』と命じられておられる箇所などに、秩序の創造ということがよく表されています。

## 5、混沌状態に戻らないために

以上のことから分ることは、創世記の「天地創造」を通して、聖書が私たちに伝えようとしていることは（神様の創造の業はこの世界の混沌状態を克服して行く業）であるということなのです。そこに神様の御意志があるのだと。

それは逆に言えば、この神様の創造の業を止めておしまいになった時には、地はまた《混沌状態》へと逆戻りして行ってしまうということなのです。それが「世の終わり・この世界の滅び」の時なのです。神様は今もこの世界が混沌状態に堕ちてしまわないようにこの世界を導き、守り、支えていて下さる、それが神様の御意志です。

この後、私たち人間が、神様の姿に『かたどって創造され』、神様から『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ』という祝福の言葉を与えられるということが記されています。それは、まさに神様の「この世界に生命と秩序をもたらす御業」を実現し、より良き世界にしていくことに参加することを神様から期待されているということを表しているのではないのでしょうか？その為に生きて欲しいと私たち一人一人に神様は望んでおられるのです。

逆に、もし、その神様の与えておられる御秩序を破壊するような行為を私たち人類が為してしまったならば、この世界はまさに「無に帰する」のです。私は、最近の原発事故の様子を見る度に、そのような秩序を破壊する行為となってしまうのではないかと思えてなりません。

## 6、光を求め、光に照らされて

そしてそのような「混沌状態」を打ち破るものとして何より最初に神様が創造されたものが『光』でした。「光」が生命と秩序をもたらす何よりのものだと。この事は本当に色々なこと

を考えさせてくれます。

『ヨハネによる福音書』はその第1章に於いて、何よりその光は「私たちの救い主、イエス様である」と告げています。私たちに真の生きる力と希望、人生を生き抜く真の秩序を与えてくれる御方であると。

ここで大切なことは、その「光」は神様から「与えられる」ものだということです。私たちが自分で作り出せるものではないのです。その真の光に照らされて初めて、自分の中に光が灯るのです。

私たちの日常の生活も、放っておいたら「混沌＝空しさ」に陥ってしまう危うさを持っています。光を見失ってしまったら、すぐに「虚無」へと引きずり込まれてしまう自らの弱さを感じます。

しかし、そのような自らの虚無や空しさとの戦いは、実は神様の戦いと繋がっているのです。そうであるならば、その戦いを神様は支え、守り、祝福して下さるに違いないのです。そして私たちに必ず「光」を注いで下さるに違いないのです。 （説教より抜粋）